

特集／途上国の首都機能移転

カザフスタンにおける首都移転——「処女地の町」から首都への変貌

岡 奈津子

一九九一年一二月のソ連崩壊を受けて独立したカザフスタンでは、一九九七年末、東南部のアルマトゥウから国土のほぼ中心にあるアスタナ（当時はアクモラ）に首都が移された。ソ連時代、カザフスタンの首都として発展したアルマトゥウは、人口一〇〇万人を超える大都市である。他方、移転当時のアクモラは、冬には寒風吹き荒ぶ田舎町に過ぎなかった。首都移転はなぜ必要だったのだろうか。

●新首都と「南の首都」

新首都アスタナは、カザフスタンの中心からやや北東寄りの草原地帯に位置する。首都になったところ、市の人口は二七万人程度であったが、現在では五七万人（二〇〇七年一月）に倍増している。

アスタナは一八三二年、ロシア軍の要塞として建設され、のちにアクモリンスタ市となった。一九五〇年代の「処女地開拓」（カザフスタン北部で実施された大規模な農地開発事業）にちなみ、一九六一年にはツェリノグラード（ロシア語で「処女地の町」の意）と名付けられたが、独立後アク

モラに改称された。

一九九七年一二月の遷都後まもなく、この町の名前は再び変わっている。一九九八年五月、アクモラはアスタナ（カザフ語で「首都」の意）という新しい名称を与えられた。なお、この理由として、「アクモラ」という響きの縁起の悪さも指摘された。カザフ語で「アク」は「白」、「モラ」は「墓」を意味するからだ。

一方、天山山脈の支脈サイリースキー・アラタウ山脈の北麓に位置するアルマトゥウは、人口一二九万（二〇〇七年一月）。首都移転後も「南の首都」と呼ばれ、カザフスタンの経済・文化・情報の中心としての地位を維持している。

もとはカザフ人の集落であったアルマトゥウの名称は、一説には周辺に群生していたリンゴ（カザフ語で「アルマ」）の木にちなむといわれる。一八五四年、この地を併合したロシア軍がヴェールノエ要塞を建設、一八六七年にこれが市に昇格してヴェールヌイと改められた。一九二一年、アルマ・アタに改称されて以降、ソ連時代はこの名前と呼ばれていた。

アルマトゥウ・アスタナ間は飛行機で一時間四〇分だが、列車だと一昼夜の長旅だ。最近では、これらの都市を二三時間で結ぶ特急列車も登場した。アスタナ国際空港の新ターミナルが日本のODAによって建設され、首都にふさわしい空港設備も整いつつあるが、国際便の乗り入れではアルマトゥウに及ばない。

ここで、美しい山々を臨むアルマトゥウと、遮るもののない草原に位置するアスタナの違いを、うまく表現した小話を紹介しよう（なおこの小話は、独立後の私有化政策のもとで、国有財産が次々と売却されたことを揶揄している）。

ナザルバエフ大統領がある朝、目を覚ましてびっくり仰天し、妻のサラに叫んだ。「おい、山がないぞ、山まで売り払ってしまったのか？」  
「あなた、なに言ってるの。ここはアスタナよ。」

ところで、前首都・新首都ともに日本とのつながりがあるのはご存じだろうか。第

図1 カザフスタンの新旧首都



二次世界大戦後、日本兵がロシアのシベリアに抑留されたことはよく知られているが、彼らは中央アジアへも送り込まれた。アルマトゥ市内には日本人抑留兵の埋葬地が三カ所あり、科学アカデミーや発電所など、彼らが建設に動員された建物がいまなお残る。一方、アスタナの都市設計を手がけたのは日本の建築家、黒川紀章氏である。

ちなみにロシア革命から数えると、カザフスタンの遷都は一九九七年で三度目である。一九二〇年、ロシア領内にキルギズ自治共和国（当時、ロシアではカザフ人のことを誤ってキルギズ人と呼んでいた）が設立された際、その首都はオレンブルグであった。この自治共和国の領域には、現在のカザフスタン南部は含まれていなかった。一九二五年に南部が編入されるとオレンブルグはロシア本土に移管され、南部の町クズルオルダを首都とするカザフ自治共和国が形成された（一九三六年、ソビエト連邦を構成するカザフ共和国に昇格）。アルマトゥへの遷都は一九二九年である。

### ● 移転の理由

首都移転構想は一九九四年七月、ヌルスルタン・ナザルバエフ大統領によって議会に提案され、圧倒的多数の賛成を得て決議された。しかし、これ以前に議論が尽くされてきたわけではなく、当時の世論も移転を支持するとは言い難いものだった。

遷都の半年前（一九九七年六月）、ギレ

ル研究所が実施した世論調査（アルマトゥ、アクモラ「当時」を含む六都市で実施された電話調査。サンプル数一四〇〇人）によれば、「首都移転に賛成」と答えた人は全体の一一・二％、「どちらかといえば賛成」は九・九％だった。これに対して、「どちらかといえば反対」は一六・九％、「反対」は四六・八％であった。すなわち、全体のおよそ三分の二が遷都に反対していたのである。また、同じくギレル研究所が一九九七年六月に行った調査によれば、回答したアルマトゥ市民五〇〇人のうち、二七・八％（一三九人）が移住希望を表明した。しかし、希望する移住先としてアクモラを挙げたのはわずか二人に過ぎず、多くはロシアか、旧ソ連以外の外国へ移住することを望んでいた（それぞれ六六人、五二人）。

首都移転が必要なる理由として、大統領・政府はアルマトゥの大気汚染、地震への懸念（一八八七年と一九一一年に大地震にみまわれている）、人口過密、地形上の制約のほか、首都は国の中心部にあるのが望ましいことを挙げた。

大気汚染は確かに深刻だ。車の排気ガスが主な原因のひとつだが、アルマトゥの車は増える一方である。ソ連時代に計画された地下鉄建設は、ソ連崩壊とともに頓挫した（ただし最近工事が再開され、二〇〇九年の完成が見込まれている）。ちなみにアルマトゥは町全体が南北に傾斜しているが（南が山側）、北に行くほど空気がよん

でおり、住宅地としては南側が好まれる。

地理的には、アルマトゥは対クルグズスタン（キルギス）国境近くに位置している。中国も比較的近いが、対中国境までは直線距離で二〇〇キロ以上ある。首都が国境地域にあるのは望ましくないという考えが、近隣諸国との有事を念頭に置いているのであれば、カザフスタンとクルグズスタンのあいだでは、深刻な紛争に至りうるような対立要因は存在しない。他方、中ソ対立の時代にはカザフスタン東部で中国との武力衝突も発生したものの、カザフスタン独立後、両国は経済的・政治的関係を深めている。ソ連から引き継がれた未画定の対中国境問題も解決済みである。

いずれにしても、大気汚染にせよその他の理由にせよ、巨費を投じて首都を移すには決定的な理由とは言い難い。カザフスタンはいまだこそ高成長に沸いているが、一九九〇年代半ばにはまだソ連崩壊のショックから立ち直っていなかった。またカザフスタン中部および北部は、厳しい大陸性の気候で寒暖の差が激しく、冬はマイナス四〇度まで冷え込む。比較的過ごしやすい気候のアルマトゥと比べると、アスタナは住みやすさという点で確実に劣る。

移転後にアルマトゥからアスタナへの異動を余儀なくされた官僚は、家族を残して単身赴任し、週末にアルマトゥに戻るといふ生活を続けた人も少なくなかった。また遷都後しばらくは、ほとんどの国が大使館



## 特集／途上国の首都機能移転



アスタナに関する大統領の著書  
『ユーラシアの中心で』(2005年)

をアルマトウに置いたままであった。ここ数年、ようやくアスタナに大使館を移す国が出始めたが、日本大使館がアスタナに移ったのは二〇〇五年一月になってからのことだ。

### ●民族問題との関係?

このように、多くの人が納得するような理由が存在しないなかでささやかれたのが、民族問題との関わりである。日本の七倍以上の広大な領土を持つカザフスタンでは、ロシアと国境を接する北部（および都市部）にロシア人が比較的多く住む。ロシアとの境界線が大きな意味を持たなかったソ連時代、ロシア人のあいだではカザフスタンの住民という意識が希薄であった。彼らはソ連崩壊によってほぼ自動的にカザフスタン国民となったが、ロシアとの二重国籍は認められなかった。

一九九〇年代前半には、このことに不満を持つロシア人たちが、自分たちの居住地域のロシアへの併合を要求するのではないかとしばしば予想された。そのため、首都移転の真の目的は、北部の分離主義傾向を抑えることにあったのではないかと、との憶測がとびかっただけではない。

一九九〇年代半ばは、確かにロシア人の民族運動が盛んで、ロシアとの二重国籍の是非などが活発に議論されていた。しかし、民族紛争によって国家の崩壊が危ぶまれるほど危

機的な状況にあったわけではない。また遷都後、真つ先に移住した官僚にはカザフ人が比較的多いこともあって、アスタナのカザフ人人口は増大したが、それが北部諸州の民族構成を劇的に変化させたわけではない。

ちなみにソ連およびカザフスタンの国勢調査によれば、アスタナの民族構成は、一九八九年にはカザフ人一七・七%に対してロシア人が五四・一%であったが、一九九九年にはそれぞれ四一・八%と四〇・五%と、カザフ人の割合が激増している。他方、アルマトウでもカザフ人のシェアは増えているものの、依然としてロシア人のほうが多い（一九九九年の人口比は、ロシア人四五・二%、カザフ人三八・五%）。

カザフスタン北部の民族構成にもっとも大きな影響を与えたのは、首都移転ではなく非カザフ人人口の絶対数の減少である。カザフスタンでは独立後、ロシア人やウクライナ人、ドイツ人などの大量流出が続いた。北部のロシア系住民は地元への愛着が強く、ソ連崩壊後もカザフスタンに残るのではないかという観測もあったが、実際には北部でも流出が見られた。

なお、首都移転とほぼ時を同じくして実施された州の統廃合は、州別民族構成のばらつきを縮小する効果をもたらした。一九九七年春、地方行政効率化の名のもとに州の数は一九から一四に削減されたが、これによってロシア人人口の割合が過半数を超

えていた北カザフスタン州と東カザフスタン州に周辺の州が統合され、結果としてこれらの州のロシア人比率は減少した。

カザフスタン政府が「ロシア人問題」を重視していたことは確かだが、遷都と民族問題との関係は必ずしもはっきりしない。それよりも明白なのは、ナザルバエフ大統領が新首都の建設に並々ならぬ意欲を示しかつその「成功」を国内外で誇示しているという点である。首都の移転そのものも、数々の建築プロジェクトも、大統領の強いイニシアチヴの下で行われてきた。

唐突ともいえる遷都が可能になった背景には、大統領への権力集中がある。カザフスタンの統治システムは極めて中央集権的で、州知事、アスタナおよびアルマトウの市長（州知事と同格）はすべて大統領の任命である。また、議会はほぼ大統領支持派によって独占されており、行政に対するチェック機能をほとんど果たしていない。

### ●名称をめぐる問題

さて、アスタナという名称が首都移転後に付けられたものだとすることはすでに述べたが、カザフスタンでは、このほかにも地名の変更があちこちで行われてきた。しかし、こういった名称変更は必ずしも、かつてモスクワから押しつけられたものを昔の名前に戻す、ということに留まらない。ソビエト的、あるいはロシア的な名称を消し、新たにカザフ語による名前をつけるこ

とで、カザフ人の国家としての性格が強調されているのである。

アルマトゥという名称をめぐる問題は、独立後の地名論争の代表例のひとつといえよう。上述したように、この町はソビエト政権樹立後ヴェールヌイからアルマ・アタに改称されたが、カザフ人はずっとアルマトゥと呼んでいた。しかし、ソ連時代にはロシア語が圧倒的に優勢であり、またアルマトゥ市民も非カザフ人が多数派であったため、アルマトゥではなくアルマ・アタが市の名前として内外に定着していた。

独立後の一九九三年、ロシア語での呼称もアルマトゥに統一されたが、これについてはいまだに反対意見も少なくない。ロシア人を中心とするロシア語話者は、言語によって地名が異なる（例えば「横浜」はロシア語では「ヨコガマ」となる）のは当然であり、ロシア語では慣れ親しんだアルマ・アタのままではいけないか、と主張している。実際、ロシア語を話す場合にはアルマ・アタのほうが発音しやすいのだが、ロシア人らの反発にはこれ以外にシンボリックな側面もある。彼らは独立後の度重なる名称変更によって、自分たちの言語的・文化的権利が脅かされ、存在をも否定されるような居心地の悪さを感じているのだ。もともとソ連時代には、カザフ人がそのような感情を抱いていたのだが。

カタカナへの翻字も難題だ。日本の中央アジア研究者のあいだでは、カザフ語の発

音に近い「アルマトゥ」を使うことでほぼ合意が形成されているが、新聞などでは「アルマトイ」と書かれることが多い。その他、「アルマトウイ」、「アルマテイ」などと表記されることもある。このような混乱が生じた理由のひとつは、カザフ語の表記にロシア語と同じキリル文字が使われていることにある。アルマトゥはキリル文字で Алматы と表記される。ロシア語の Алматы は日本語の「ウ」と「イ」の中間に相当し、はつきりと発音されるが、カザフ語の Алматы を軽くしたような音だ。同じ文字でも、ロシア語とカザフ語とでは発音がかなり違うのである。ちなみに「アルマテイ」は、英語表記 Almaty に影響されたものだ。

### ●草原のジュミンランド

首都が移されて以降、アスタナはめざましい発展を遂げている。官庁街や高層住宅に加え、スーパーマーケット、スポーツ・文化施設、モスク、水族館など、ありとあらゆるものが建設された。オランダ・ハーグにあるマドローダムに倣って、カザフスタンのミニチュア版テーマパークも誕生している。

なかでも最近、話題を呼んだのは、二〇〇六年九月に完成した「平和と和合の宮殿」だ。ピラミッドを模した高さ六二メートルのこの建物は、イギリスの建築家ノーマン・フォスター氏のデザインによるもので、イシム川を挟んで大統領公邸に向かい

合う位置にそびえ立っている。この巨大プロジェクトの総工費は七〇〇〇万ドルともいわれている。

アスタナのピラミッドは、ナザルバエフ大統領の強い意向を受けて建設された。ナザルバエフは二〇〇三年九月、イスラーム教、キリスト教、ユダヤ教、仏教、神道などを代表する世界各国の宗教指導者をアスタナに招いたが、この催しを定期的（三年ごと）に開催するにふさわしい会場として建てられたのがこの宮殿なのだ。二〇〇六年九月には、国連安全保障理事会の会議場に似せて作られた最上階の円形ホールで、第二回の会合が開催された。なおこのピラミッドには、博物館、コンサートホールなどのほか、一五〇〇席のオペラハウスも設けられている。

「平和と和合の宮殿」は、世界平和に貢献する偉大な指導者として国際的に認知されたいというナザルバエフ大統領の野心と、オイルマネーに沸くカザフスタンの好景気を象徴している。しかし、建設ラッシュが続く市の中心部から少し離れたら、ソ連時代とさほど変わらぬ質素な町並みが現れる。先進国並みの豊かさを手に入れた人々がいる一方で、アパートの公共料金の支払いにも事欠く人々がいる。彼らの目には、きらびやかなピラミッドのステンドグラスはどんなふう映っているのだろうか。

（おか なつこ／アジア経済研究所地域研究センター）